



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3384 号 2016.12.5 発行

天の無数の星々は仕事などしない——AI+BI がかたちづくるユートピア

『人工知能と経済の未来』著者、井上智洋氏インタビュー

シノドスジャーナル 2016年12月5日

人間のように様々な知的作業をこなす汎用人工知能が普及する未来。そのとき爆発的な経済成長が可能となり、途方もなく実り豊かな生産の時代が到来する。だがそれは、人類が労働から解放されるユートピアなのか、それとも人類が生業を奪われるディストピアなのか？ カギを握るのはベーシックインカムを導入にある、という井上智洋氏にお話を伺いました。(シノドス・オープンアカデミアにて収録)

■シノドス・オープンアカデミアとは？

近刊著を課題図書として、先端知に触れつつ議論、その議論をもとに著者にインタビューする最新型のゼミナールです。改めて学びたい社会人の方、大学とは違う学びが欲しい学生の方、もちろん現在の知識レベルは問いません。新しい「知のネットワーク」に触れてみたいすべてのみなさんのご参加をお待ちしております！

<https://synapse.am/contents/monthly/synodos>

人工知能 (AI) の現在

——汎用人工知能 (汎用 AI) の出現は、経済にどのようなインパクトをもたらすのか？ これが本書のテーマです。まず未読の読者に、汎用 AI についてご説明いただけますか。

今ある人工知能 (AI) はすべて特化型人工知能と呼ばれるもので、ひとつの (ないしは、いくつかの) 特定のタスクしかこなせません。たとえば、チェスの AI はチェスをするだけ、囲碁の AI は囲碁をするだけです。それに対して人間は、汎用的な知能を持っており、チェスをしたり囲碁をしたり、あるいは人と会話したり、事務作業をしたりと、色々なタスクをこなせます。汎用 AI は人間と同じように、様々なタスクをこなすことのできる AI です。

まったく人間と同じ知的振る舞いができる必要はないのですが、ほとんど人間並みの知性を持った AI が汎用 AI と呼ばれることが多いようです。もちろん、汎用 AI はまだこの世には存在しません。開発は数年前に始まったばかりです。「アルファ碁」という囲碁プログラムを開発して有名になったグーグル傘下のディープマインド社も、現在、汎用 AI の実現を目指しているところです。

——汎用 AI の完成とは何をもって完成したといえるのか、基準などはありますか？ SF 小説などでは、人間並みの知性という題材となると、すぐに感情や心理の理解というテーマになります。しかし最近の AI を見ていると、人間の感情がなくても仕事の代替は可能に思えてきます。そうすると、何をもって汎用 AI (人間並みの知性) の指標とするのでしょうか。

汎用 AI の定義はばらばらだと思います。たとえば、ジェフ・ホーキンスというアメリカの起業家は、人間の脳新皮質だけ AI として再現できれば OK だといっています。感情をつかさどる脳辺縁系は必要ないわけです。それに対して、日本の全脳アーキテクチャイニシアティブというグループは、文字通り脳辺縁系を含む全脳を AI として再現しようとしています。こちらは感情も必要だというわけですね。

また、汎用 AI のできるタスクの中には、AI を開発する能力も含まれていると見なされることがしばしばあります。そうすると、汎用 AI が自分よりももっと優れた汎用 AI をつくり、そしてそれを繰り返すことで、人間をはるかに凌駕する超 AI (Artificial Super Intelligence/ASI) が実現するという人もいます。

レイ・カーツワイルの前にシンギュラリティを提唱した人にヴァーナー・ヴィンジという数学者で SF 作家がいますが、彼のいうシンギュラリティとは、まさにそんなふうに再帰的に AI が AI をつくって、超 AI が生まれるというものです。これは知能爆発ともいわれています。

こうして、汎用 AI が生まれたらすぐに超 AI が誕生して、人間がゴミくずのような存在になってしまう、と危惧されることがありますが、わたし自身はそこまで凄惨な汎用 AI は難しいのではないかと考えています。今世紀前半くらいには、平均的な労働者のできることでならぬ AI くらいしか現れないと予想しています。

——それはなぜでしょうか？

今の AI は数値的な目標を最大化するための手段を発想することはできます。テレビゲームの得点をアップするために、新しい攻略法を生み出すようなことです (ディープマインド社の「DQN」という AI)。しかし、人間は何の数値的目標もなしに突然新しいことを思いついて、芸術的作品を創作したり発明をしたりしますよね。

人間の知性にはそういうひらめきが含まれていますが、それは「最適化」ではない何かです。AI はより「最適化」された AI を再帰的に生み出せるようになるでしょう。しかし、そういう方向に進化していても、人間のようにひらめく AI が生まれることはありません。

したがって、優れたひらめきが必要とされる仕事は、ディープラーニングを含む今の AI 技術の延長上ではできるようにならないのではないかと考えております。今後、圧倒的な AI 技術のブレイクスルーが起きれば別ですが、人間に与えられた目標を最大化するだけで、それ以上に何もひらめかすことがない AI が人間を支配するなんてことはあり得ないのではないのでしょうか。なお、今でも AI が作曲したり、絵画を描いたりしていますが、いずれも人間の芸術家の真似でしかありません。

——現在は ASI のはるか以前、特化型 AI が日々、進化している段階ですね。それでも、その進化は目覚ましく、メールや通話、金融データなどのビッグデータを AI が分析して、テロや国際犯罪などの情報を CIA や FBI に提供している、などという話も聞きます。また、IBM が開発した AI コンピューター「ワトソン」は、ガンを抑制する可能性のあるタンパク質を数週間で 6 つ発見したとのことですね。人間の科学者はタンパク質ひとつ発見するのに平均で 1 年かかっています。ほかにも「こんなことが？」というようなことが、すでにたくさんあると思います。面白い事例を教えてくださいませんか。

日立製作所の「H」という AI は素晴らしいと思います。「H」はビッグデータを分析して、ホームセンターがどうしたら売り上げを伸ばせるのかを提言することができました。人間のコンサルタントの提言は、売り上げの増大にはつながらなかったにも関わらずです。

また「H」は営業型のコールセンターの営業成績の向上にも貢献しました。日立はビッグデータの実用化の一環として、ウェアラブルセンサを用いて人々の幸福感 (ハピネス) を計測する技術を開発したのですが、「H」はスタッフのハピネスを増大させると営業成績が良くなるということも明らかにしています。従業員のハピネスが企業の売上向上に繋がる、という基本的な因果関係を明らかにしたわけですから、素晴らしいことだと思います。ブラック企業が問題化される今の日本では、とくに重要な見方です。

ちなみに、日立は「H」を汎用人工知能といっていますが、これは汎用性があるという意味であって、人と同程度の知能という意味での汎用人工知能ではありません。

それから、RBI 株式会社が開発したヒト型汎用ロボット「まほろ」が面白いですね。

この会社はとくにバイオ研究、創薬の実験を行うロボットの開発を行っています。実験というのは機械的な作業と思いきや、操作の間の数秒の差が決定的になるような職人芸的

な世界なんだそうです。そんな熟練研究者の技を、ロボットが再現してくれるのです。

細胞の掻き取りのような繊細なロボットをつくれるのは、他に日本に2社、ヨーロッパに2社しかないとのこと。科学的な実験には、1分子を直接扱うような長年日本でしか成功させられなかった実験があったりして、折り紙文化の日本人に優位性のある分野もあります。ただし、そういった器用な人間が行っても、実験が成功したりしなかったりと偶然に左右される面がある。それをロボットが行うと、確実に成功させられるのです。

この会社の CIO で AI 研究者の高橋恒一さんは、科学的な実験の自動化を考えています。今のところ作業の自動化ですが、仮説を立てて検証するところまで、すべてを自動化しようと企図しておられます。



AI と人間の間に横たわる「生命の壁」

——そこまで AI ができるようになると、人間の失業が気になりますよね。「AI がすべて特化型である限り、技術的失業は一時的局所的な問題にとどまる」と書かれていますが、技術的失業を解消するのに足る十分な産業は残る、あるいは新しく生み出せるものなのでしょうか？

これまでイノベーションによって普及した技術は、おもに人間の肉体労働を肩代わりするものでした。それに対し AI は、人間の頭脳労働を代替していきます。それでは人間は他に何をやればいいのかという話になります。とはいえ、特化型 AI が普及しても、すべての職業が一気に失われるわけではないので、人間に優位性のある他の職業に移ればよいことになります。それは AI をつくるような職業とは限りません。

わたしがよく例にあげるのは、最近駅前などにあるストレッチ専門店です。10 年前には、ヨガの教室はあってもストレッチ専門店はなかったと思います。いずれにしても、AI は人間のような身体を持たないので身体知を持ちえません。したがって、身体性を必要とする仕事は残りやすいと思います。

本でも書きましたが、哲学者で AI 研究者の西川アサキ氏は、ロボットにとってもっとも難しい仕事はヨガのインストラクターだといっています。ロボットはどのようなポーズをとったら心地よくなるのかを、自分の身体に問い合わせることができないからです。

——ほかにはどうでしょうか？

そうですね。さらにいうと、これから増える仕事というのは新種の職業とは限りません。スポーツ選手とかダンサー、フードファイターのような、人間が行うことに意味がある仕事はこれから増大していく可能性があります。

ダンスを踊るロボットは今でもありますが、もちろん人間のダンスとは別ジャンルで、まったく代替的ではありません。ロボットの早食い競争も同様でしょう。ただ、そういった職業に従事している労働者の数はそもそも少ないので、失業した人の受け入れ先としてはそれほど有望ではありません。

一定規模の産業で、今雇用が増大しているのはやはり医療・福祉関係ですね。高齢化は留まることがないので、これからも増え続けるでしょう。介護士がその典型ですが、介護の現場にロボットが導入されても、当面高度なコミュニケーションをとることができないので、やはり人間の仕事は残りつづけるし、その需要は増大するでしょう。

汎用 AI にいたる過程でもっとも難しくて大きな課題が言語理解です。AI が言葉の意味がちゃんと理解できて、高度なコミュニケーションがとれるようになったら、かなり汎用的に利用できるでしょうね。

そういう点を見ても分かるように、特化型 AI と汎用 AI を完全に区別することはできません。特化型 AI が言語理解を習得するなどしてだんだんと汎用性を増していったら、汎用

AI に近づいていくということになるかと予想されます。本では分かりやすく、汎用 AI が出現する 2030 年以前と以降ではっきり区切りましたが、実際の変化はもちろん連続的で、2030 年以前から仕事の減少は少しずつ始まっていくと思います。

——身体知や欲望や感覚など、AI と人間との間には「生命の壁」がある、というお話はとても面白いですね。

たとえば、レストランでネズミが出たとき、AI ロボットのウェイターはゴキブリと同じように平気で叩き潰すだろう。それは AI と人間の間には「感覚の通有性」が存在しないため、ネズミを叩き潰すときに人間に生ずる嫌悪感が分からないからだ、と。

しかし、AI が社会に普及していくにしたがって、AI の「無感覚さ」に人間の方が適応することで、生命の壁がなくなっていくことはないでしょうか？

その可能性はあります。しかも、若い人ほど人間的なものより機械的なものを好みます。最近マクドナルドのある店舗で、タッチパネルで注文する仕組みを取り入れたというニュースが流れましたが、人間のスタッフよりそちらの方がいいという声がたくさんネットにあがっていました。人間と喋るのはダルイというわけです。

また、バーテンダーはホスピタリティーを必要とするので、残りやすい職業だと本では書きました。しかし、若い人ほど機械が酒さえ出してくれればいいと思う傾向があります。変に話しかけないで欲しいというわけです。

感覚の通有性を持った人間が痒い所に手が届くようなサービスをしてくれる、ということに魅力を感じない人が増えているといえますよね。機械的な対応で結構だと。ネズミへの嫌悪感は若い人の方が強そうですが、全体的に機械的なことはむしろ好ましいと思う傾向があるでしょう。

汎用 AI と資本主義の終焉

——汎用 AI が普及する未来では労働者の多くが雇用されず、汎用 AI とロボットが生産活動に全面的に導入されるような「純粋機械化経済」になるとのことです。

純粋機械化経済では、人類が今まで経験したことのない爆発的な経済成長が可能となる一方で、日本がこの流れに乗り遅れると、外国資本の企業から商品やサービスを購入しなければならなくなり、日本人の収入の道は絶たれかねないとも書かれています。

しかし、来たる第四次産業革命において、グーグルやマイクロソフトといった米企業に勝てる気がしないのですが。

勝てる気がしないですよ！（笑） けれども、1980 年代のバブルの勢いが日本にあれば、全然伍してやっていけたはずなのです。けち臭さが今、日本をどんどんダメにしています。文化や科学技術、人材を育てるのに、大盤振る舞いしないでどうするだろうって思いますね。どこもかしこも予算縮小。それじゃホープレスですよ。

政府はお金を投じて、AI の研究開発を促進すべきです。AI のような技術は経済全体に拡散し、経済全体の効率性を上昇させます。政府が研究開発を支援せず、ただ民間に任せているだけでは、イノベーションは過小にしか引き起こされません。日本にはグーグルやマイクロソフトのような IT 系の巨大企業が存在しないのですから、なおさら政府は力を入れなくてはなりません。

均衡財政主義なんかを掲げている限り、アメリカや中国に勝てるわけがありません。国民全体にお金をばらまいて消費需要を増大させる。文化、科学技術、教育への投資を惜しまないこと。そうしたことが重要だと思います。羽振りの良さが日本を救うと思います。今ここで、政治家、官僚、国民が価値観を変えないと、間違いなく未来はありません。今が来たる第四次産業革命に向けたラストチャンスなんですよ。

——しかし、第四次産業革命にうまく乗れたとしても、それだけでは未来はバラ色になりません。

スマートファクトリの実現によって生産の現場に労働者はほとんど必要なくなり、パーソナル・アシスタントによって事務職が不必要になる。さらには、汎用 AI 搭載ロボットによってサービス業もなくなる。人間は労働から解放されるわけですが、このことは賃金を得

る手段も消滅することを意味します。

そこで質問なのですが、労働者の全員が飢え死にしても、資本家は己の儲けが少なるのを残念がるだけで、それ以上には困らないと書かれています。そしてそのような状況が、AIがもたらすディストピアとしての未来になるわけですが、そうした未来を選択しないためには経済に介入する「政治的な決断」が必要になります。デモクラシーに期待できるとお考えでしょうか？

資本を持たない人の方が圧倒的な多数派となるので、デモクラシーがうまく機能していれば選挙では勝てると思います。ただ、変に自己責任論が蔓延して、資産がない自分たちが悪いんだ、などと考えて納得してしまうようではダメですね。自己責任論というようなくだらない発想を、いかに叩き潰すかが今後の課題です！

いずれにしても、ディストピアとしての未来を回避するためには、現在の社会制度のあり方を大きく変革しなければならないでしょう。かつてマルクスとエンゲルスは、労働者階級が革命によって資本家階級に勝利することで、資本主義が終焉するという未来を展望しましたが、だまっているとそれとは逆のことが起こるわけですから。

つまり、労働者階級が賃金を得られなくなることで消滅し、資本家階級がすべてを手にする事で資本主義が終焉してしまいます。そんな資本家一人勝ちの未来にしてはなりません。

AI とともにある未来をユートピアにするために

——そこでベーシックインカム (BI) です。

汎用 AI が高度に発達する未来を、すべての人々が豊かさを享受できるユートピアにするためには、BI の導入が不可欠だとされています。BI の導入そのものにも議論がある中で、AI と連動したかたちで BI を導入するには、どのような段階を踏んでいくべきでしょうか？

先ほど、特化型 AI から汎用 AI の普及は連続的で、2030 年以前から仕事の減少は少しずつ始まっていくと述べました。したがって、ベーシックインカムももっと早くから必要で、わたしは今からもう導入した方がいいと思っています。

AI の発達に関わらず、できるだけ早く BI を導入するべきです。月 1 万円から始めて、少しずつ増やしています。一年目はその後は 7 万円ですばらく固定します。これを「固定 BI」と呼ぶことにしましょう。

『人工知能と経済の未来』ではあまり触れなかったのですが、BI の財源として貨幣発行益を使うこともできます。つまり、ヘリコプターマネー (ヘリマネ) 方式の BI です。1 万円を作るのに 20 円かかるのであれば、残りの 9980 円が貨幣発行益です (この見方には批判もありますが)。日本銀行が発行した貨幣を原資に財政支出を行うのがヘリマネだとすると、ヘリマネは貨幣発行益を使って支出を行うことだといえます。貨幣を発行してどんどん政府が使いましょうというわけです。

ヘリマネ BI の方は「変動 BI」とわたしは呼んでいますが、インフレ率を確認しながら額を調整していきます。それに対して、税金を原資とした BI は先ほどいったように「固定 BI」と呼び、こちらは基本的には額の微調整は行わず、最低限の生活保障を目的として数年は固定させます。国会での決議があれば変えるという感じです。

AI が高度に発達し、生産のオートメーション化が極度に進んだ場合、放っておくと物凄いデフレーションが起きてしまいます。AI・ロボットがどんどんモノをつくることで潜在的には爆発的な経済成長が可能になるわけですが、消費需要がそれに追いつかなくなるからです。

需要が (潜在) 供給に対して不足すれば、デフレーションが起きます。ですので、ヘリマネ BI をどんどん増やして、インフレ気味にしないといけません。そうでないと、供給面では潜在的に経済成長率を上昇させられるはずなのに、需要がそれに追いつかないがためにそうした成長率の上昇が頭打ちになります。需要制約に引っかかってしまうというわけです。

——BI 導入の目的は社会保障だけではないのですか？

そうです。AI という供給側の革命に対し、ヘリマネ BI という需要側の革命も必要なのです。後者がないと、爆発的な潜在供給の伸びに需要がついていけなくなります。まとめると、BI には (1) 生活保障、(2) 需要の増大という二つの側面があって、(1) は固定 BI、(2) は変動 BI (ヘリマネ BI) が担うべきだというわけです。

もし BI のような制度を導入しなければ、未来の経済は暗澹たるものになります。BI なき AI はディストピアをもたらすのです。しかし、BI のある AI はユートピアをもたらすことでしょう。

——最後にそのユートピアについてお聞きしたいと思います。

汎用 AI の普及によって人間が労働から解放される時、時代はバタイユのものとなるとおっしゃっていますね。効率とか有用性などといった価値観は廃れ、人間の生がそのまま肯定されながら、現在という時間をそれ自体で満ち足りた瞬間として体験していくだろうと。汎用 AI が現れる未来を資本主義の消滅と重ね合わせ、そしてそれをバタイユの経済学/哲学によって意味づける、こうしたヴィジョンはとても美しいものですが、はたして人間はそうした精神的進化をとげられるのでしょうか？

機械化の果てに現れるのは、映画「マトリックス」のように、バーチャル・リアリティ (VR) につながれて生を生き長らえる家畜のような姿にも思えます。

わたしが最後に示したヴィジョンは、たしかに VR なしの未来です。VR に耽溺した人は傍から見て美しくはないですが、本人は刹那的な陶酔の瞬間をそれも持続的に味わっているかもしれません。未来のことを考えないで、この瞬間の快樂、陶酔を大事にするという意味では、バタイユ的といえなくもない。しかし、それは退廃的ではありますよね。(バタイユは退廃的な人ではありませんが。)

VR なき AI+BI ならば人間は退廃せずに、(傍から見ても) 生き生きと過ごすことができると思います。しかし、VR の出現は AI+BI とはまた違った影響を社会にもたらします。人が一生 VR に耽溺して良いのかどうかは、人類に残される最後の議題かもしれません。

功利主義的に考えれば VR は OK のはずですが。しかし、われわれは功利主義を超えるような価値を提示し得るか。そこはわたしにもまだ分かりません。この問題は開いたままにしておきましょう。

個人的なことになるのですが、わたしは昔から役に立つものが好きではなかったのです。ですので、バタイユにとっても共感していました。それとともに、面倒くさがりなので、役に立つことを AI がみんなやってくれれば良いのにとも思っていました。そして、バタイユ的な世界がもし訪れるならば、それは資本主義をむしろ極度に推し進めた先にしかないだろうと考えています。

有用性にしか尊厳を見出すことのできない哀れな近代人を、バタイユは次のように批判しています。「天の無数の星々は仕事などしない。利用に従属するようなことなど、なにもしない」と。人間の価値は有用性にはありません。人の役に立っているか、社会貢献できているか、お金を稼いでいるかなどといったことは最終的にはどうでもよいことなのです。

わたしの AI と BI に関する話を聞いて「未来はバラ色ですね」と言う人が結構います。ですが、それはちょっと違います。このまま制度を何も変革しなければ、労働者がみな飢え死にするようなディストピアがやってきます。ユートピアにするためには、BI のような新しい制度を積極的に導入しなければなりません。積極的なアクションを起こしたときにのみ、未来はユートピアになるのだと強調したいと思います。

人工知能と経済の未来 2030 年雇用大崩壊 (文春新書)

著者/訳者: 井上 智洋 出版社: 文藝春秋(2016-07-21) 定価: ¥ 864
Amazon 価格: ¥ 864 新書 (256 ページ) ISBN-10 : 4166610910
ISBN-13 : 9784166610914

井上智洋 (いのうえ・ともひろ) マクロ経済学

駒澤大学経済学部講師。慶應義塾大学環境情報学部卒業、早稲田大学大



学院経済学研究科博士課程単位取得退学。2015年4月から現職。博士(経済学)。専門はマクロ経済学。最近は人工知能が経済に与える影響について論じることが多い。著書に『新しいJavaの教科書』、『人工知能と経済の未来』などがある。

<地域防災訓練>障害者「1泊も困難」 避難所宿泊ルポ 静岡



静岡新聞 2016年12月5日
宿泊型訓練で避難所の環境改善点を話し合う障害者と地域住民＝3日午後3時40分ごろ、静岡市駿河区の市立豊田中

「地域防災の日」に合わせ、静岡市駿河区の市立豊田中体育館で3日から1泊2日で行われた宿泊型訓練には、地域住民とともに身体障害者や知的障害者ら約15人が参加した。阪神大震災や東日本大震災など過去の大災害では、地震や津波などから逃れても、過酷な避難生活に絶えられ

ず多くの要援護者が亡くなった。南海トラフ巨大地震に備える本県でも要援護者の関連死対策は急務。訓練に参加し、課題を探った。

車椅子の息子を車から降ろしたとたん、身動きが取れず途方に暮れた。女性(48)は心臓病と脳性まひがある15歳の息子を連れ初めて宿泊型訓練に臨んだ。

駐車場から体育館までの通路は砂利道と多くの段差。息子に必要な吸引機器や酸素ボンベなどを抱え、車椅子を押すことは不可能だった。近くにいた住民4人の協力を得て、母子はようやく避難所に入れた。

体育館内の卓球場に設けられた福祉避難室。床は板張りで午後3時半ごろから室温が下がり始めた。脳性まひで体温調整ができない男性(29)は「体が固まって全身が動かなくなると、最悪呼吸もできない」と、電動車椅子で暖房機器に近づいた。

午後7時すぎ、冷え切った玄関にダウン症の男性(16)が座り込んでいた。団体行動が苦手な男性は気に入った場所を離れず、「目を離すことができない」と、母親(41)は苦笑いを浮かべた。

就寝時の問題は、寝床の堅さ。寝返りが打てない男性は床擦れを生じやすい。体操用のマット2枚とエアマット、毛布を重ねたが、翌朝は「背中や尾てい骨がかなり痛む」と顔をしかめた。

障害者の要望を全て受け入れることは難しい。実際、訓練中に「わがままではないか」と漏らす参加者の声も耳にした。しかし、例えば体温の保持やトイレ環境などは、生命に関わる問題だ。

女性は息子の医療ケアに必要な1泊分の大荷物を前に「避難所では1泊でも難しい」と顔を曇らせた。その上で、「地元の訓練に参加を続ければ、災害時に誰かが安否を気に掛けてくれるかもしれない」と期待する。

災害が来る前にこそ、障害者の声に耳を傾けたい。少しの工夫と思いやりで何を準備できるか。各地域で考えておく必要があると強く感じた。

ネパールの水泳選手 東京パラ目指し神戸で合宿

神戸新聞 2016年12月5日

日本のコーチから泳ぎ方を教わるネパールの選手＝しあわせの村

東京パラリンピックを目指すネパールの水泳選手3人が、神戸市北区山田町のしあわせの村を訪れ、7日まで日本の強化指定選手と共に合宿している。ネパールは昨年の大地震でプールが損壊するなど練習するのが難しい環境で、同国の競技団体から申し入れがあった。

市は、東京五輪、パラリンピックの参加国との交流を進める「ホ



スタウン」に登録された。障害者向けの施設が充実する同村は、その趣旨に添い、海外からの事前合宿誘致に乗り出していた。

今回、東京に向けて日本政府が主導する国際貢献事業「スポーツ・フォー・トゥモロー」事務局に、ネパールパラリンピック水泳連盟から依頼があった。

選手らは2日に来神。4日は村内プールで、日本身体障がい者水泳連盟のコーチから、泳ぎのこつを教わった。大地震でがれきの下敷きになり、両脚を切断した後に競技を始めたラメシュ・ハッテリ選手（18）は「日本の練習環境がうらやましい。同じ施設がネパールにあればもっと練習を頑張る」と話す。

ネパールの連盟会長サロジャ・スレスタさんは「母国には室内プールがないので、泳げる季節が限られている。トレーニングの機会が与えられ、本当にありがたい」と語った。

選手らは今後、同村職員らの案内で「神戸ルミナリエ」などの観光もする。（藤村有希子）

不足する通級学級、充実訴え 障害児の保護者、署名提出 毎日新聞 2016年12月5日
通級指導の教員を一日も早く増やすよう求める母親たち＝東京都千代田区の衆議院第1議員会館で



障害がある子供が一部の授業を在籍する通常学級でなく別に受ける「通級学級」の充実を求める声が広がっている。担当教員の不足から希望しても通級指導を受けられない子供の保護者らが11月、教員を増やすよう求める約3万人分の署名を文部科学省に提出した。日本発達障害ネットワークなど4団体は通級指導を受ける児童・生徒数に応じた教員配置を求めて緊急

アピールを出した。

介護殺人や心中、全国で179件...13年以降 読売新聞 2016年12月05日

高齢者介護を巡る家族間の殺人や心中などの事件が2013年以降、全国で少なくとも179件発生し、189人が死亡していたことが読売新聞の調査で明らかになった。

ほぼ1週間に1件のペースで発生しており、70歳以上の夫婦間で事件が起きたケースが4割を占めた。介護が必要な人が10年前の1.5倍の600万人超に上る中、高齢の夫婦が「老老介護」の末に悲劇に至る例が多いことが浮き彫りになった。

読売新聞は、13年1月から今年8月までの3年8か月間に発生し、介護を受けている60歳以上が被害者、その家族が加害者となった殺人（未遂含む）や心中、傷害致死などの事件を対象に調査。警察発表や裁判資料のほか、湯原悦子・日本福祉大准教授（司法福祉論）の研究資料などから事例を収集し、分析した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行